

1 工程@1円～知的障害者の労働現場

39： 暮らしやすい地域になったのか？

千葉 晃央

再会で感じる変化

15年ぶりに、以前の職場でお世話になった利用者の方々に会う日々を過ごしている。時間は様々なものを変化させる。私は30歳前後から40代後半へ。若さも、細さも、ヘアも失った。時間は平等に経過する。しかし、その間の出来事は平等ではない。もう2度とお会いできなくなってしまった方もおられる。そう思うと「再会」だけでも十分な幸運である。

ルックスの変化は相手の態度も変化させる。若いに一ちゃんだった私は、今やおっさんになった。もうそれだけで、以前とは違うコミュニケーションをとる方もおられる。そもそも、以前と外見が変わりすぎて、同一人物と認識しづらいということも当たり前にあるし、そもそもそんな人がいたことを忘れることも誰だってある。以前いた人だなと気付いておられても、その人がなぜまたここにいるのか？ということに疑問を感じる方もいる。疑問を感じる場面は誰でも気持ちよくない。だから私には近づかないし、関わらないという方もおられる。そういう時は私もむやみには近づかない。何回か会っているうちに、あれ？と立ち止

まって視線を向けてくる方もおられる。

15年もたつと、ご家族の状況も以前とは異なってくる。親を亡くされた方もいるし、ごきょうだいと暮らすようになった方もおられる。そして、一人暮らしにチャレンジされて頑張っている方もおられる。

こうなってくると労働を一義的機能に持つ事業所だけではカバーはできるわけもない。行政のケースワーカー、計画相談（ケアマネジメント）、障害者地域生活支援センターの相談員、ヘルパーさん、グループホームなど、その方の生活全般に目を向けて必要があれば支援が入っている。週5日、働く場での支援と、それ以外の場での支援が並行的に進行し、生活全般を計画相談がマネジメントしているのが基本となっている。

観光産業の成熟と生活環境

15年もたつと職員も大きく入れ替わっている。先日は15年前に私が担当していた業者さんの担当者の方と再会をした。

15年間での町の変化も著しい。周辺に1つしかなかったホテルは7つぐらいはある

だろうか？京都はメインの通りはもちろん路地を入ったところにも宿泊施設がたくさんできていて把握ができない。朝や夕方には大型バスの駐停車が日常的にある。それによる視界不良や交通渋滞も起こる。歩道は大きなスーツケースをゴロゴロと引く人が増え、それを引いて団体で移動する修学旅行生や海外の観光客の姿も毎日である。

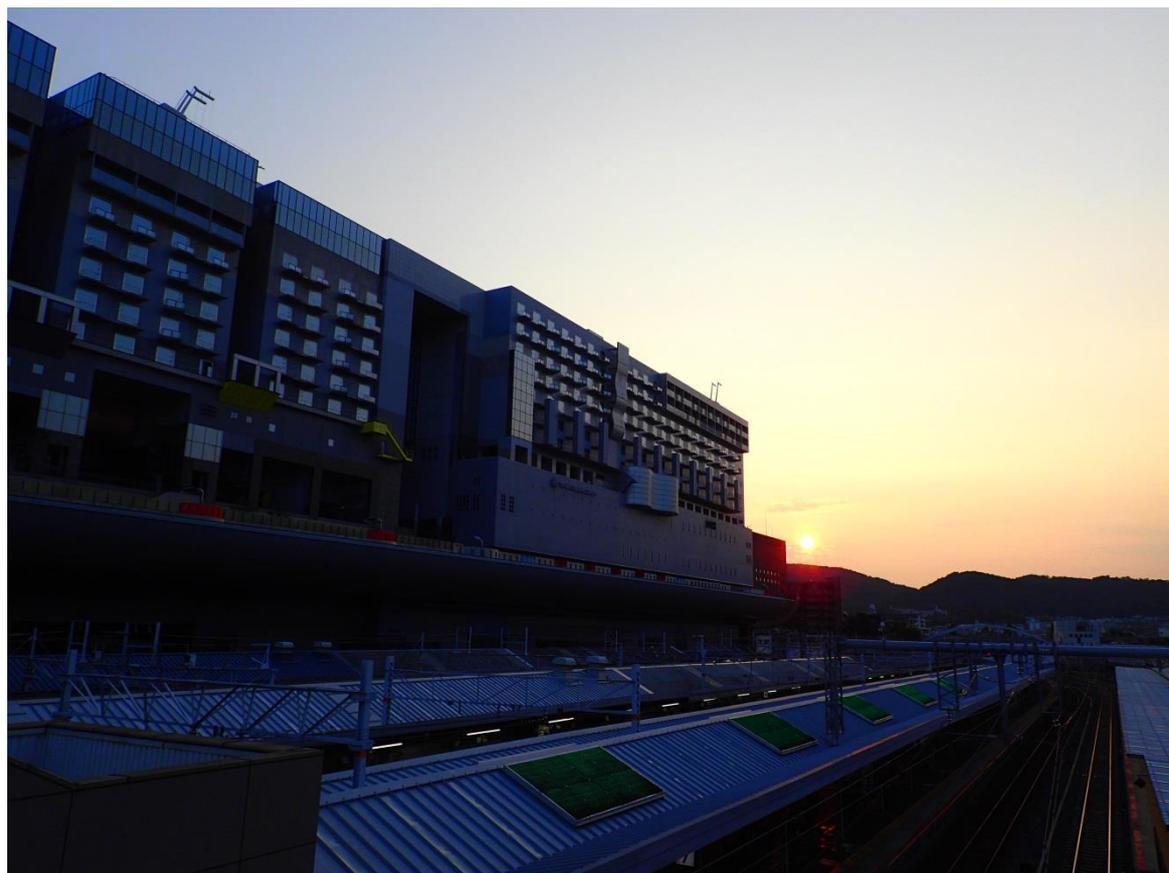
利用者の方々は、そんな中に紛れて通所する。以前は生活者とビジネスマンが多かった。スーパーマーケットは閉店撤退、文房具店は縮小。アマゾン、アスクル、100均一の台頭は、仕事に必要な品がほとんど何でもそろう店を駆逐した。ドラッグストアは0店舗が4店舗に。コンビニは1店舗が3店舗になった。駅には巨大商業ビルができ飲食店など、夜もにぎやかである。住宅兼店舗という業態が減った。そして、歩

道のごみなどが増え、町が汚くなった。

生活者中心から旅行者中心に

京都市は左京側、東山側に集中する観光客を何とか分散させようと、右京側、西京側などの観光地化に躍起になっている。そして、市バスが観光客でごった返し、住民の移動手段として使えないという声が聞こえてくる。市バスは市内に住む障害者は手帳提示で無料で乗車できるので最もメジャーな交通手段である。それが揺らいでいるのである。

地元では、ごみの増加、騒音問題、交通渋滞などのオーバーツーリズムの問題が顕著になっている。市長は行政の建物などをことごとく商業施設、ホテルになどに転用



してきた。先日やっところ以上は宿泊施設は作らない方向に舵を切るというニュースが流れた。

観光地にはお土産がつきものである。観光産業の仕事はお菓子などがあつた。しかし、以前は中小規模のお菓子会社の小ロットの仕事を私たちの施設でもしてきた。現在は、観光客の増大、観光産業の成長で大手が生き残っている。つまり、それはロットが大きい。そうなってくると私たちの規模では不足になり依頼が減っている。

そして、エコやリサイクルの循環に関わっている者が増えた。それは官制のものもあれば、民間のものもある。祇園祭などの使い捨てプラスチックを抑制する取り組みにも知的障害者の現場が関わっていて、報道でも取り上げられた。こうした傾向はあちこちから聞こえてくる。

これからの15年は？

ダウン症の方は特にそういわれることが多いが、知的障害の方は老化がはやいといわれてきた。ハンデキャップ故に、精神的ストレスからも苦勞は当然多い。苦勞は体に刻まれる。以前より、少し小さくなったり、細くなった姿で通う姿に出会うことが多い。

また、こうして多数が15年後も同じところで働いている事実をどう評価するかである。ずっと働くことができたことはうれしいことでもある。しかし、本来の施設の目的を考えると悲しいことでもある。それが現在の福祉の到達点である。

これから15年後はどうだろう。障害者福



祉領域が高齢者福祉領域の事業所にとってかわられるかもしれないということはよく言われている。当事者の方でも高齢者施設の方が若い職員が多くてうれしいといった声も聞こえてくる。そのぐらい障害者福祉の領域はスタッフの年齢も高齢化している。

福祉領域も競争原理があれば、おのずと淘汰され、よいものが複数の選択肢を持って残ると以前はいわれていた。結果的に優秀な職員が各事業所に少数点在するだけになってしまった。各施設に一人ぐらいの熱心な職員がいてもできることは限られ、その事業所全体の質はどんどん後退する。その現状に失望し、理解が深い職員から退職する。ひと月の間に、あそこは事業所を減らして統合、ここは事業停止、あちらは計画的閉所…。そんなニュースがやみそうもない。これからの盛り返しに期待したいが、そのきっかけがあるのだろうかと思つくと悲觀的觀測が蔓延している。今やるべきことに適切

に取り組むことができる余力がこの業界に残っていることを願ってやまない。

BACK ISSUES

利用者さんの呼び方は、これでいいのか？38

2019年9月

カメラ37 2019年6月

窓を救え！36 2019年3月

別れ35 2018年12月

人生をかける意味があるか？34 2018年9月

業務の適正化はできるのか？33 2018年6月

安全衛生委員会32 2018年3月

施設というコミュニティ31 2017年12月

職場づくり30 2017年9月

健康管理29 2017年6月

音28 2017年3月

救世主になりたい援助職27 2016年12月

事件について26 2016年9月

クルマ社会と福祉政策25 2016年6月

施設が求める「障害者像」はあるのか？24

2016年3月

連絡帳23 2015年12月

におい22 2015年9月

作業着21 2015年6月

食べる20 2015年3月

通勤19 2014年12月

クスリの作用、人の作用18 2014年9月

倫理観でかたづけられる暴力17 2014年6月

触れる16 2014年3月

対談企画「教育と福祉の連携を模索する」2014年3月

情報の格差15 2013年12月

20年前のノートから14 2013年9月

そうじのねらい13 2013年6月

個別化の暗部12 2013年3月

グループワークの視点11 2012年12月

実習生がやってきた！10 2012年9月

月曜日のせいやな9 2012年6月

所得を決める福祉職？8 2012年3月

世界とつながる社会福祉現場7 2011年12月

この現場へのたどり着き方6 2011年9月

障害を持つ友達と過ごすとは？巻末座談会

2011年9月

旅行がない！5 2011年6月

職員の脳内回路4 2011年3月

たかがガムテープ、されどガムテープ3

2010年12月

利用者が仕事上の戦友2 2010年9月

障害者自立支援法で不景気に！？1 2010年6月